足もとを提灯

生き方の追求

水上 勉

足もとと提灯

生き方の追求

水上　勉

足もとと提灯—生き方の追求

昭和51年4月3日　第1版発行

著　者　水　上　　勉　©

発行者　高　橋　芳　郎

発行所　社団法人家の光協会

東京都新宿区市谷船河原町11（〒162）　印刷　大文堂印刷KK

電話 東京260-3151(大代表)　振替 東京5-4724　製本　寿製本KK

Printed in Japan　落丁・乱丁本はおとりかえいたします

書籍コード　0095-54206-0301

足もとと提灯——生き方の追求

足もとと提灯——生き方の追求／目次

足もとと提灯……5
単独旅行者の稔り……13
ゴミの如きもの……22
誰が石を投げよといったか……31
雪と戦場……39
母親四態……48
「幸福」は知識などであるものか……57
田の思想……66
あさましき真実……75
人生の時間……83
片輪者という勿れ……92
貧窮礼讃……101

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

知恵と下駄とそれから……109
飽食煖衣の鳥けものよわれは……118
月見の思想……125
孤村の冬……132
両足のない人……140
国の果実……147
根に帰る……154
こんご草履とあげ底靴……161
延安で見たもの（一）……168
延安で見たもの（二）……175
延安で見たもの（三）……182
創るよろこび……188
貧の躾富の放慢……195
読書のよろこび……202

装丁　伊藤憲治

足もとと提灯

小さい頃、よくもらい風呂に行った。私の家ぐらいがそうであった。たいがいのところに風呂はあって、それで、日が暮れると、風呂場から煙の出ている家がうらやましかった。父が大工のくせに、どうしてうちだけが、こんなことだったのか不思議でならぬ。とにかく貧乏のどん底で、昔はもっと、村なかのべつの家に住んでいたそうだが、わたしが生まれて九歳まで育った家は、さんまい谷といって、埋葬地の谷のとば口にある一軒家だった。一軒家といっても、よその木小屋を改築したもので、電燈がなかった。

灯がないのだから、風呂がなくても当然だったろう。

よその家へ風呂をもらいにゆくのは、子供心にいやだった。先の家に同級生がいれば尚更だし、女の子がいると、はずかしかった。それに一家全部そろってのもらい風

呂なので、子供心に気づかいもあった。といって、それでは、四日も五日も風呂へゆかぬと、学校でわらわれる。馬鹿にもされた。それで、夏場は川水で洗ってすませたが、冬は十日に一度は入らぬと、ヒビ、アカギレがひどい。首すじや耳うらに埃の皮ができる。

父は遠いところで仕事する習慣だったのでめったに家にいなかった。いない家だから風呂も設けなかったのだろうが、家にいた母と五人の子供はめいわくだった。春秋ならともかく、冬の雪道を、しまい風呂をめがけてゆく夜ふけはつらい。

母は出がけに提灯に灯を入れ、私のほうへさし出した。先頭に立って足もとを照らせという。私は次男坊で、兄がいた。下は弟が二人、妹が一人だが、そのころはまだ妹が生まれていなかったので、母は赤ん坊だった末弟を背中に背負い、次弟の手をひいて出る。兄は少し耳が遠かったので、私が先頭に立ち、提灯をさげ、うしろをくる者の足もとと、自分の足もととを照らしながら歩くのであった。雪道は歩きにくかった。人の通りかためたところはすべるし、一歩そこをふみはずすと、わきがやわらかいので、足はふかくめりこむ。

「よう照らせよ。あんじょう照らさんと歩けんぞ」

母はいらだたしげに言った。それはそうだ。提灯が早く行ってしまえば、うしろの連中は足もとが暗い。といって、足がおそいと追いついてつっかえるだろう。つっかえると固雪を踏みはずす。よこへ踏み入れたら、母だって子を背負ったままこけてしまう。

＊　＊

雪がとけて、土が出れば、石ころ道だった。これもよく照らさぬと歩けなかった。轍(わだち)が二本、どの道にもあった。草の生えたまん中に牛と馬の糞(ふん)がたまっていた。これを踏んではいけない。先をゆく提灯もちは、それでいっそう気をつかったのだ。

雨の多い日は傘(かさ)をさした。泥みちはよくはねあがった。それで裾(すそ)をはしょって歩いたものだが、片手に傘、片手に提灯をもって歩く夜は、やはり子供にはつらかった。

つらかったという思いは、五十八歳の感想ではないのである。じじつ、九歳でこの村を出るまでの記憶の中で、なぜ、わが家だけ風呂がなくてそこらじゅうへもらい風呂にゆかねばならなかったのか。父への恨みがよみがえる。いくら風呂場がほしいと

頼んでみても、負けてしまう母の意気地なさも恨みだった。子供は子供なりに、風呂のないことが、人なみの子でない悲しみを抱かせられたのである。

若狭は、冬は雪がひどく、春秋は雨が多かった。もらい風呂の夜、月の出ていた記憶はあまりない。

「足もとよう照らせ」

と母はいったが、時々風で消えかける提灯をさし出しながら、だまって歩いていた。足もとをみつめながら……。

私ら一家が、父ぬきで、村道をもらい風呂に歩くこの足音は、垣根(かきね)ごしに家々へ聞こえたらしかった。ああ、また六左の子らが風呂もらいにゆく、と人々はいったそうである。六左はうちの屋号で、六左衛門の略称である。九歳で寺へ出てからは、このもらい風呂の夜道のかなしみから解放された。

しまい風呂といえば、その家の人たちがすんだあとの風呂へ入れてもらうことだが、たいがいの家は少し足し湯をして待っていてくれた。文左衛門、善左衛門、林太郎といったところがよくゆく家だった。そして、それらの家へゆくのには、私の家か

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

らは石の道が多く、また雪道も長かった。

途中で、むささびの住む宮の森をすぎる。雪の中で、むささびはよく啼いていた。どこかで、のこぎりをつかうような声でもあった。夏は夏で、宮の森は蝙蝠の巣だったが、空あかりがまだ残っている頃に、線をひいたように蝙蝠は走るのだった。走るというよりは、さっと天から落ちるみたいにみえたが。提灯の灯に蝙蝠は吸いよせられるものか、何匹もやってきて目の前をかすめた。

この光景を四十代になって、新潟県の十日町から飯山へ向う雪道を歩いていて思い出した。私には連れがいたが、土地の人が案内に立って、一匹の黒犬を連れてきていた。

「提灯ではね、心もとないのでね、これをつれてきましたよ」

と案内の人はいった。汽車は不通だった。発電所のある村まで、一里の夜道を私は歩かねばならなかった。小さな駄犬だった。駄犬は飼主の指図どおりに、吠えもせず、駅前から私たちの先頭に立って歩いていた。雪はやんでいたが、積もった雪道は、若狭の少年時と同じで、歩くところだけ細くかたまっており、凍っていた。よく

すべった。向うからくる人に出あうと、どっちかが、よこの雪を少し踏みかためていざって待った。黒い犬はほどほどに足を早めたり、おくらせたりして先を歩いた。

黒犬を提灯にする夜寒かな

誰かの句にあるそうだ。犬を提灯にした経験はこれが一度だった。しかし、その時私は、小さい頃の、もらい風呂の夜の村道を思い出して眼頭がうるんだ。四十一歳で新聞記者をしていた頃のはなしである。

＊　＊

私が出家した寺は禅寺で、京都五山のひとつ、相国寺の塔頭で瑞春院といった。そこの和尚さまは、小さい私に「脚下照顧」ということばを教えた。子供にはむずかしいことばのようにきこえた。しかし、このことばは寺院の玄関だとか、庫裡の一部だとかに、よく書かれてあった。額にもはめられていた。

足もとをよく見ろ。足もとをよく見ていないとひょろついてしまう。人生はいろいろのことがあって、その旅はその人なりの長さをもっていようが、足もとのひょろつくようなことでは、短い旅も長い旅も心もとない。よく足もとを照らして、顧みてお

らぬと、まちがいが起きよう。

和尚さんはそういった。すると、私は子供ごころに、提灯をもっておれば大丈夫だと思ったものだ。が、さてその提灯も、黒犬もおらぬ雪道は、どうして歩けばよいだろう。

「和尚さん、提灯がないときはどうすればいいんですか」

と私はきいた。馬鹿者め、と和尚さんは眼をひきつらせた。

「へりくつをいいくさって、そんなことをいうから、こんなめにあうんじゃ」

和尚さんは、平手で私の頭を力いっぱいなぐった。耳の上から、頭のてっぺんへ、電気のように痛みが走るのがわかると同時に、提灯のなかった夜のことを思い出した。

ろうそくがきれていたために、母が私に提灯を出さなかったことが一度あった。

「つとむよ、月が出とるか出てみいや」

と母はいった。私は外へ出たが、月は出ていなかった。たぶん、これも冬だったろう。雪はあいかわらず積もっていた。提灯をもたぬ私は先頭に立ち、耳の遠い兄がつ

ぎを歩き、次弟の手をひいた母は、末弟を背負っている。
「つとむよ、ゆっくり歩け。お前が見えんと歩けもせん」
母はうしろからいった。私が黒犬のかわりだとわかるのは、ずいぶんあとのことだ。

＊　　＊

妙なことを書いた。禅宗の「脚下照顧」はありがたい教訓だが、提灯をどうするかについて、あまりくわしく説明がなされていない。闇の雪夜を、提灯なしで歩かれた人は、たくさんおられるだろう。
足もとのあぶない闇は、すなわち、今日の私の人生である。私は五十八歳。いま辛うじてひとつの提灯を手にしている。だが、その提灯の灯が消えそうになることがある。そんな時私は、いま書いてきた雪の夜のことを思うのである。すると、どこやらから、光が一筋さしてくる。

単独旅行者の稔り

家が無くなった、と書けば、住む家が無くなったという意味に解されやすいが、ここでいうところの「家」とは、人の住む家であると同時に、自分がうまれた家という意味である。

つまり、自分を産んでもらった「家」が無くなったという意味をいう。

極端な解釈かもしれぬが、太平洋戦終結後、この国が民主主義国になって、個人の尊厳に価値観を置いて以来、それまで在った、日本の「家」というものは消えた。家族制度とか、封建制度とかいうことばにつながってきたところの「家」の存在は無くなって、自由に生きる人間の、つまり単独旅行者の世界になった、といっていいかもしれない。

だが人間は、まだこの国に家族制度があった封建時代にも、単独旅行者であったこ

とはいうまでもなかった。産まれた時は一人だったし、死ぬ時も一人であった。このことは古今を通じてちがわぬことだが、しかし、いくら単独旅行者でも、一人で気ままに生きられないことは自明である。困った時は誰かの厄介にならねばならないのが人間である。

先ず、自分一人で生きられぬ嬰児(えいじ)、幼児は、どう無理したって一人では生きてゆけまい。助けてくれるのは母であり、父であり、祖父母であり、兄姉であった。このことは昔も今もかわりはない。

第二の場合は老期である。若い時はいくら働けても、年をとれば歩行もままならなくなる。大小便の始末さえ出来ぬ時がくる。これを助けるのは誰だろう。やはり、その子らであった。あるいは孫たちであった。であったというのは、いまは、この責任がはっきりしていない核家族の世情をみるからだ。

第三は何かというと、病気である。病気にかかれば、いくら青壮年期でも単独旅行はかなわぬ。誰かの厄介にならねばならぬ。しかしこの病人を助けるのも親族であった。ここでまたであったというのも、「家」が無くなっている今日、この責任がはっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.